

特集：魔法の習慣 8

第2章

1人でも多くの人が 車で移動を楽しめる社会に変えていく

株式会社ニコ・ドライブ 代表取締役社長 じんむら 神村 浩平さん



和田 純子

東京都中小企業診断士協会三多摩支部

最近、よく耳にする言葉「インキュベーションオフィス」。地方自治体や公的機関が創業間もない企業や起業家にワーキングスペースを貸与し、起業を支援する施設のことである。

神奈川県川崎市高津区にあるインキュベーションオフィス「かながわサイエンスパーク」の中に、株式会社ニコ・ドライブの事務所がある。

株式会社ニコ・ドライブは、2015年2月に設立されたベンチャー企業で、主に自動車の手動運転装置を製造・販売している。社長の神村浩平さんを筆頭に、エンジニア1名、マーケティング1名、インキュベーションオフィスの運営会社から参加しているアドバイザー1名の計4名で事業を行っている。



株式会社ニコ・ドライブ代表取締役社長の神村浩平さん

1. 手動運転装置を通じた社会貢献

同社が製造・販売する手動運転装置「ハンドコントロール」は、自動車のアクセルとブレーキを手で操作するための運転補助器具である。手動運転装置の重さは900gで、折り畳んで持ち運ぶことが可能だ。自動車のアクセルとブレーキペダルに装置を取り付け、ナットを手で締めるだけで簡単に装着できるため、自動車本体の改造が不要であり、足の不自由な人でも健常者と同じ自動車に乗ることができる。レンタカーにも利用できるため、自分で自動車を運転してドライブや旅行を楽しむことができる。

従来は自動車の改造費用に数十万円かかっていたのに対し、この装置を使うと十万円程度の費用に抑えることができるため、コスト負担が少なく済むところも魅力的だ。

また、大阪の工場で製造した部品は、神奈川県内の就労継続支援事務所で組み立てられている。就労の場を提供することで、障がい者の雇用創出にも取り組んできた。

同社は手動運転装置の製造・販売だけにとどまらず、全国の自動車教習所で手動運転装置による自動車運転免許取得の場を普及する活動にも力を入れている。

このように、製品を販売するだけでなくサービスも提供することで、足の不自由な人の行動範囲の拡充に貢献してきた。



手動運転装置「ハンドコントロール」



手動運転装置を自動車のアクセルとブレーキペダルに取り付けた様子

2016年7月16日、17日に、同社は外国車メーカーのBMWと共同でイベントを開催した。手動運転装置を装着した電気自動車を東京都内の公道で試乗できる体験型のイベントである。このようなイベントは前例がなく、革新的であった。7月の連休の中、2日間合わせて約20名が試乗を体験した。

試乗した人からは「手動運転装置ユーザーにとって、外国車のBMWを試乗できる機会はいままでになかったので、とても良い体験ができました」など、嬉しい声が聴けた。

今回の試乗会が大変好評であったこともあり、次回は国産自動車メーカーの車両で試乗会を開催する予定である。国産自動車に手動運転装置を取り付けた試乗会を開催すれば、より日常生活の環境に近い体験を提供できる。

2. あるエンジニアとの出会いと別れ

手動運転装置の存在を知ったのは、あるエンジニアとの出会いであった。16歳のときに交通事故に遭って以来、車椅子で生活していた神村さんは、足の不自由な自分でも普通車で自由に運転できる方法を探していた。

そのとき、情報収集していたインターネット掲示板を通じて出会ったのが、手動運転装置を1人で開発していた元大手自動車メーカーのエンジニアである。

手動運転装置に魅了された神村さんは、エンジニアとともに、その可能性を探り始める。

神村さんは製造の経験がなかったため、エンジニアが開発した装置を神村さんが販売するという役割分担で、2013年から二人三脚の事業がスタートした。

しかし、その矢先にエンジニアが病に倒れてしまう。彼の余命があまり残されていないことを知ってから、神村さんは彼の想いを引き継ぐために猛勉強し、短期間で開発・製造のノウハウを習得した。そして彼の遺志を引き継ぎ、神村さんは2015年に株式会社ニコ・ドライブを設立した。

3. 固定された価値観を変える難しさ

事業に取り組んでいくうえで、神村さんは健常者、足の不自由な人の両方に製品の素晴らしさを伝え、さまざまな意見を聞いてきたが、後ろ向きの意見をもらうことも多かった。

健常者からは、「自動車のアクセルとブレーキを手で操作するのは危ないのではないか」という不安の声、「車椅子で生活している人は送迎車に乗せてもらっているから、自動車を運転する人はいないのではないか」という認識不足による声。一方、足の不自由な人からは、「神村社長だから手動運転装置を操作できるのであって、私には無理」というあきらめの声があった。

「『新しいことに挑戦したい』と周りの人に言うと、『いまのままでよい』と言う人が9割、『新しいことをやってみたら』と言ってくれ

る人は1割しかいない。足の不自由な人が自分で自動車を運転できるようになったら、道路があるところならばどこにでも行けるようになるし、海外でも運転できる。行動範囲が一気に広がるのに、その一步を踏み出さないのはもったいないと思います」

言葉で製品の素晴らしさを伝えるだけでは難しいと感じたため、試乗会のように体験してもらおう場を設けた。2013年の創業からここまで来るのに3年の月日が経っている。

「いままで会社を経営してきましたが、人の固定された価値観を変えることは、とても難しいですね。身にしみてわかりました」

4. 世界一になれるフィールドを探す

「この事業が失敗したら自分にできることはないと思っている。これからの人生は、自分のやりたいことに1秒でも多くの時間を使いたい。弊社の手動運転装置を世界中に広めて、1人でも多くの足の不自由な人に使ってもらうために、私はこの事業に全力を注ぎたいと思っています」

そのため、スポットの仕事依頼の電話がかかってきても断るようにしている。

「製造業なら車椅子を作るとか、介護用ベッドを作るなども考えられますが、私は世界一になれる分野だけで事業をやっていきたい。足の不自由な人でも手動で自動車を運転する装置を作ること、それを世に広めることに関しては、世界一になれると思ったんです」

汎用性のある装置の開発には、いくつかの課題を抱えている。特定メーカーの自動車に装着して操作性を良くしようとする、他社の自動車には装着できなくなる。また、製品の小型化を進めていくと、今度は操作性が悪くなる。トレードオフの関係になるのは、製造業の難しいところである。

どのような自動車にも手動運転装置を装着できることを目指しているが、現状は90%。世界中のすべての車種に対応できることを目指して、同社は日々精進している。

5. 「目標達成」と「そくいんのこころ 惻隠之心」

神村さんに「魔法の習慣」について尋ねてみた。

「目標を達成できなくても何かの糧が得られると思ってしまうと、目標を達成できなかったことに対する甘えが出てくるし、それがクセになる。だから、私はうまくいかなかったときの経験を、“糧”として捉えないようにしています」

目標を掲げてうまくいかなかった場合、多くの人はその経験を糧にして次につなげようとする。しかし、神村さんは目標を「必達」としているため、失敗を糧にするという考えをもたない。

「目標を掲げたら、必ずコミットするための戦略を立てる。1つひとつの目標を必ず達成するための手を打ち、全力を尽くす。スポーツの試合に例えると、リーグ戦で勝つよりも、トーナメント戦で勝ち進んでいくイメージです。1つひとつの仕事にしっかりと準備して取り組んで、クリアしていくことが大事。物事がうまくいって豊かな人生を過ごしている人を見ると、そのような習慣を大事にしているように感じますね」

最近、社員にも目標を「必達」する行動を浸透させている。社員自身が売上金額、営業件数、商品改良の回数などの目標を設定し、必ず達成するためにはどうしたらよいかを自ら考えて行動している。

「弊社の社訓に『惻隠之心』（すべての人に思いやりをもって接すること）という言葉があります。ただ行動すればよいわけではありません。人の気持ちを感じて、相手の立場で物事を考えて行動しないと、人は成長しないと思います」

実際、同社に取材の依頼などで電話をすると、社員の方の対応がいつも丁寧で、とても印象が良い。神村さんが大事にしている「惻隠之心」が社員の方にしっかりと浸透しているようだ。



同社の行動指針が書かれている社訓

6. どんな人でも人生は一度きり

「世界でバリアフリーが続いている場所は、どこだと思いますか？」

そのように質問してきた神村さんの目は輝いていた。

「道路です。自宅の前から自動車に乗って道路に出れば、好きな場所へどこまでも行くことができます。足の不自由な人が自動車で道路を走り、バリアフリーを体験するには、弊社の商品が最適です」

道路は、ほとんど段差がない世界共通のバリアフリー。足の不自由な人が手動運転装置を装着した自動車に乗り、道路の上をどこまでも走ることができれば、どれだけ世界が広がるだろう。

「どんな人でも人生は一度きりなんです。時間が経てば年をとっていくので、世の中の人には1日も時間を無駄にしてほしくないと思っています」

足の不自由な人が自分で自動車を運転し、1日でも長く充実した人生を送れる社会にしていくために、神村さんは動き続けている。

7. 2020年に向けた新たな挑戦

同社では、手動運転装置を装着した自動車で行ける「ユニバーサルツーリズム」の実現を目指している。この旅行は、障がいの有無にかかわらず誰でも参加できることが特徴である。

「弊社がやろうとしていることは、難しいことではないと思っています。レンタカーを借りて、弊社の手動運転装置を装着するだけ。全国の自動車教習所で弊社の手動運転装置を使って運転免許が取得できるように、インフラ整備を進めているところです。旅行会社はツアー商品を販売していますし、『ぜひ、一緒にやりましょう』という声があれば、すぐにも実現できますよ」

すでに旅行会社との話が進んでおり、東京オリンピック・パラリンピックが開催される2020年までに、ユニバーサルツーリズムを実現するのが目標だ。

「最初に難しいと思うことでも、やってみたらできることもあります。一度きりの人生を充実させるために、どんどんチャレンジしていくことが大切です」

約1時間の取材が終わり、退席しようとしたところ、次の取材ということで、テレビ局の方が来ていた。プロモーションに力を入れているようだ。「かわさき起業家オーディション」に出場して優秀賞を受賞するなど、積極的な行動力にも心が惹かれる。

ハンデキャップを感じさせずに、次々と新しい道を切り開いていく神村さんをこれからも応援していきたい。

神村 浩平

(じんむら こうへい)

株式会社ニコ・ドライブ代表取締役社長。神奈川県川崎市生まれ。16歳で交通事故に遭い、車椅子に乗るようになる。半導体メーカー、外資系証券会社の勤務を経て、2015年に株式会社ニコ・ドライブを設立。座右の銘は「飲むメーカー」。顧客、社員、社会から飲ばれるサービスと環境づくりを心掛けている。



和田 純子

(わだ じゅんこ)

岡山県岡山市生まれ。地元の大学を卒業後、建設会社に入社。28歳のときに上京し、建設会社でマンション購入者向けの工事ドキュメントの作成などを手がける。2016年4月中小企業診断士登録と同時に開業。現在、助成金の制度推進、補助金の検査、執筆、「まな」の名前で受験生支援などを行っている。

